GEMS OF POETRY

西詩愛吟集

GEMS OF POETRY

與謝野鐵幹序

西詩愛吟集

文學士　小原無弦譯

序

文選白氏文集さては法華經など、內外二典の如何に王朝文學を豐富ならしめたるか、宋元の裨史小說の如何に德川文學を充實せしめたるか、げに何れの國にも文藝の盛期には、異邦の藝術の影響感化を被らざるは無かりき。明治の藝苑に西歐の花木を移植せむとするは、固より功德の大業にして、堪能の諸匠の努力を要すること多かるべし。今茲に友人小原文學士の新著、西詩愛吟集一卷、先づ原作の撰に於て譯者の嗜好に偏

すること無きば、初學者の栞として用意の存する所か。中に、サー、ゲラントの『細流』、トーマス、フードの『汝れ戀し』、ハミルトンの『ヤローの岸』、ブラウニング夫人の『ありし日』、シェレーの『六絃琴に合して歌ふ手弱女に』、サウジーの『正月元日』、プロクター女史の『疑ふを休めよ』、ウォーヅォースの『川裾なる橋によりて』等の諸篇、譯筆の簡淨にして趣致あること、近頃この類の書中に稀に見る所なり。かの邦語の修養なき人々が、漫りに何々の詩と名づけて、荒涼の譯述頻りなるに興醒めたる我心は、この一卷に對して少からず敬虔の意を表せむとす。長保の宮廷の一才女ば、早くも香爐峰の句を諳んじて、その雪の日のひかり、後の世にもかがやきぬ。知らず、西歐の詩文、わが明治の藝苑に匂ふこと深くして、如何にあまたの警策をか生まむとすらむ。

巳歳初冬　　與謝野　寛

詩の御園のさまよひにそと摘みとりし花なれや。今はた夢とのみなるまぼろしの薫りをうつし植ゑたるこの一卷よ。もとには似ぬおもかげの闇のうつゝのそれにたぐへなんもおほけなの極みながら、ひたぶるに思ひ泌みぬる懷しさのみばなほ消えやらぬをそのまゝに。あはれ、昔の詩人たちの靈も通はゞかすかにだにも匂ひおこせよ。

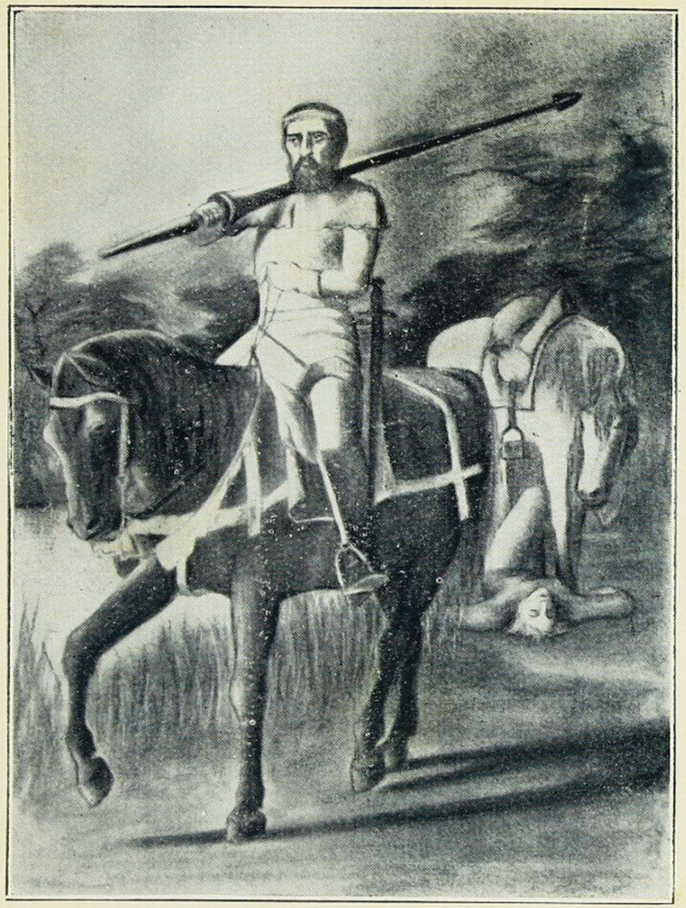
あなかしこや。

目次

雲雀に與ふ　ウォーヅヂース……一
睡眠　ブローデリップ……六
征矢と歌　ロングフェロー……九
幽寂　ホワイト……一二
アルプス龍膽　エキセルシオー……一四
死の王　プロクター……二〇
細流　サー、グラント……二三
汝れ戀し、汝れぞ戀しき、トーマス、ブード……二九
やろーの岸　ハミルトン……三二

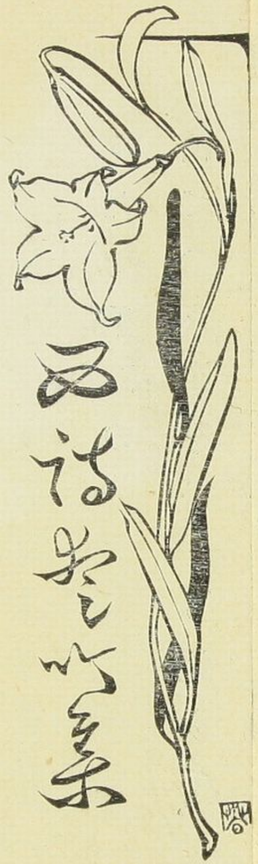
歌　コールリッヂ……六〇
ありし日　ブラウニング女史……六二
君はそれ　バーンス……六七
六絃琴に合して歌ふ手弱女に寄す……
……シェレー……六九
正月元日　サウジー……七二
ペンデミアーの川、ムーア……八〇
雲雀に與ふ　ウチーヅチース……八四
やろーの流　ローガン……八八
驚（斷篇）　テニズン……九五
あはれの少女　ウチーヅチース……九六
爾等英國の水兵、カメル……一〇〇
疑ふを休めよ　プロクター女史……一〇五
二月の夕　ロングフェロー……一一〇
三月兄弟川の川裾なる橋に凭りて……
……ウチーヅチース……一一三
スーザン　ゲイ……一一六
カレーの海のほとりに立ちて……
……ウチーヅチース……一二三
龍動橋　モローイ……一二五
老朽甲鐵艦　ホルムス……一三〇
秋の太息　リード……一三三

戰の場ゆ　テニズン……一三九
眠に寄す　ウチーヅチース……一四三
わが家　ペーイン……一四五
郭公に與ふ　ブルース……一四九
『熱睡』はわが魂　ウチーヅチース……一五三
チソーナス　テニズン……一五四
春香傳の一節……一七〇
朝鮮歌謠……一八八



ヤローの岸

戰の場ゆ　チニズン……一三九
眠に寄す　ウチーツチース……一四三
わが家　ペーリオン……一四五
郭公に與ふ　ブルース……一四九
「熱睡」はわが魂　ウチーグチース……一五三
オツーナス　テコズン……一五四
春雪傳の一節……一七〇
朝鮮歌謡……一八八



雲雀に與ふ。

小原無絃

ウォーヅヲース（一七七〇―一八五〇）

われ率て揚れ、
雲の彼方にわれ率て揚れ。
あはれ、雲雀よ、汝が歌つよし。

われ牽て揚れ、
雲の彼方にわれ牽て揚れ。
歌ひ、歌へよ、
九天遠く鳴りぞ響かむ。
われ牽て揚れ、
天上汝れがよしと思へる
聖き御園にわれを導け。

うたて荒野の
はてなき途をひとり辿りて、

今日わが心うんじ果てたり。
あはれ、靈翼われにしあらば、
扶搖に搏ちて汝がへに飛ばむ。
汝がへに滿てり、あら物狂ひ。
汝が歌にあり、聖き歡喜
われ牽て揚れ、
汝が宴樂する御空御園に
われ牽て高う高う揚れや。
汝れ、嬉々として朝の如く、
塵のこの世をあざみ笑ふか。

あはれ、思へよ、汝れに戀あり、
休息あるに、巣なきを得んや。
汝れ、おこたるも何そこなはじ。
醉へる雲雀よ、
汝が忌まるゝはわれとひとしく
旅路を辿る身なればのみよ。

山落ちたぎる溪より強き
魂をいだける汝れよ、幸の子、
天つ御神に讃美の歌を

ひたすらそゝぐ汝れよ、幸の子。
あはれ、われ等に歡喜あれな。
汝れを聽きつゝ、
忍顔もたぐる兄もさながら、
心たのしくわれたゞひとり、
塵のこの世を辿りながらも、
さりや、よき日の來るを待たなむ。

睡眠。

ブローデリップ

月しろがねに輝きて
影なが〳〵と地に落ち、
夜の沈默は露のごと
あらゆる物に滿つる時、

川、靜かなるさゝやきが
ねよとの歌をうたひつゝ、
花、眼をうげに閉づる時、
神は睡眠をたまふなり。

野菊の蕾、巣の小鳥、
畑鋤く里のうなゐ兒の
いぶせき牀に至るまで
皆しづかなる休息あり。

貧しき人の伏屋にも、
俘虜のわぶる牢屋にも、
病みたる人の寢牀にも
ねよとの歌の恵みあり。

癒えよ、薫れと休息をば
くだす御空の大神は
たゞ平和の、やすらひの
力も猛に恵むなり。

神はあせ行く花を數み、
うら泣く人に眼をとめつ、
睡眠の聖き接吻もて
倦める、痛める眼を閉ぢぬ。

涙、睡眠の知りもせぬ
榮光の生命のかへるまで、
浮世の苦痛、悲愁に
神は慰籍たまふかな。

征矢と歌。

ロングフェロー（一八〇七—一八八二）

おほ空に放ちし征矢は

地に落ちぬ、何處とも知らず。
あゝ、誰か、飛ぶこと疾き
征矢のみち見きはめ得んや。

おほ空に放ちし歌は
地に落ちぬ、何處とも知らず。
あゝ、誰か、強く、鋭く、
歌のみち見きはめ得んや。

長きのち、樫の梢に、
なほ折れぬ征矢を見出でぬ。
また、友の心のうちに、
嘯きし歌を見出でぬ。

幽寂。

ホワイト（一七八五—一八〇六）

この涙せきあえず流るゝも、
わが宿世いやしきが爲ならじ。
わが泣くも悲愁の爲ならじ。

たゞ一人われあるが爲なれや。

籬作人うみて家路いそぐとき、
谿、木原さまよふをわれは愛づ。
星うすう水の面に映るとき、
池のへにやすらふをわれは愛づ。

さもあれや、靜かなる夜の氣の
さや〳〵と聲聖くひゞくとき、
わが魂は譜異に鳴り出でて

たゞ一人あるをこそ歎くなれ。

秋の葉はひからびて飜へり、
行く水を床として流れ去る。
幽愁の聲をだに遺さゞる
葉と散るをわれいかで願はんや。

風吹けば悲しげに森鳴りて、
人の身の常なきを告ぐるらし。
われゐむも、偕にゐむ者もなく、

われ泣くも、偖に泣く者もなし。

さもあれや、夢に見る幻像や、
たゞわれを思ひ、はた愛づるかな。
飛び立たば、消え失する幻像や、
たゞ一人われあるを獨り泣く。

アルプス龍膽。

エキセルシオー

高き氷の山陰に
永うねむりし龍膽や、
心おくしのひそやかに
今し、はじめて見廻しぬ。

おのゝきつゝも見廻しぬ、—
萬物ねむりたけなはに、
死せる氷の地こえて
寒き影こそ横はれ。

音もなき雪の廣野原、
凍りつめたる海原や、
かゝる深山に起き伏しの
小草の花の身やいかに。

何、おとなひて來らんや、
何、あたゝかう息吹かんや。
如何なる希望抱きつゝ
死の眞中にも生くるらむ。

もの悲しげにくづほれて
天つ御空を仰ぎけり。
仰げば青きおほ空に
白雲うかび迷ひつゝ。

心やさしの日はゑみぬ、
和つ光りは接吻けぬ。
天にやすらふ妹のごと
月はほのかに輝きぬ。

きらめき渡る煌星は
いとたのしげに踊るなり。
あはれ冷たき下界より
あたゝかき天いと近し。
天つ御空をなつかしみ、
心雄々しう目を擧げぬ。
忽ち花の色青く
天の御色に通ひけり。

花をめぐりて閉ぢこめし
寒き氷柱も融け初めつ、
露となりてぞ空色の
花と匂へと濕ほせる。
あはれ、うんぜる旅人も
おち方遠く見渡しの
眸を花にとめながら
天つ御空を念ふかな——

あはれ、人生の雪寒くとも、
神にすがれる人々の
心に常にみなぎりて
夏と天とのなかからでや。

死の王。

プロクター（一七八七—一八七四）

老いさらぼへる死の王は
日も常照らぬ場に立ち、

いと黄なる手をさし延べて
炭黒き酒をそゝぐかな。
炭黒き酒よ、あふけなや。

美目の匂ひも失せはてし
もゝの少女も、かなしみに
堪へぬ寡婦も來て飲まむ、
炭黒き酒のひとしづく。
炭黒き酒よ、あふけなや。

博士は智慧を、詩人は
愁の影をのこしたり、
花の少女も老い去らば
凋るゝ薔薇の姿のみ。
炭黒き酒よ、あふけなや。

皆したひ寄る死の王が
笑へば、眼より鹽ぞ滴る。
いと黄なる手をさし出し
炭黒き酒を充たすかな。

炭黒き酒よ、あふけなや。

細流。

サー、グラント

『あるひは高き山を落ち、
あるひは低き谷を貫き、
流れたえせぬやよ細流、
そもや何處へ。』

『夏なつかしき日南をも、
月なき雪の荒野をも、
われ、巡禮のみちを行き
またとゞまらず。

『天つ御令をかしこみつ、
親なる大海の胸底の
安息はゆる宮さして
われ、たゞ急ぐ。』

『もゝの小暗き澤過ぎて、
ちゞの嵯峨しき山越えて
汝れ、かすけくも流れ行き、
なほ、逡巡はず。』

『沼おそろしく深くとも、
崖そば立ちて高くとも、
たゞ一筋のわが途や、
とゞまり得じよ。

『東か、西か、そはとまれ、
海のはてなき胸底の
安息はゆる宮さして
われ、たゞ急ぐ。』

『汝がへに鳥の歌ふ園、
汝れを隱して笑ふ花、
聲もやさしくとゞむるに、
やよや、とゞまれ。』

『咲きたる花のかぐはしや、
歌へる園のなつかしや、
わが行く途をとこしへに
たへに魅はす。

『さはれ、休まず、とこしへに
親なる大海の胸底の
安息とめてひとすぢに
われ、たゞ急ぐ。』

『すごき深淵、汝れ知るや、
幸のながめと言ひ得んや、
寧ろ、流れず此處にあれ、
やよや、とゞまれ。』

『如何なる靈妙住めるかは
正しく誰か語り得む。
神秘のわが世、恐らくば
奇しくぞあらむ。

『とまれ、親なる胸底に
入りなば幸はあるべきよ。
安息とめてうれしくも
われ、たゞ急ぐ。』

汝れ戀し、汝れぞ戀しき。

トーマス、ブード（一七九八—一八四五）

汝れ戀し、汝れぞ戀しき、
言ひ得るは凡てこれなり、——

夜すがらのわが幻像(まぼろし)や、
日ねもすのわが夢なれや、
わが胸の、胸のひゞきや、
わが禱るときの惠や、
汝(な)れ戀し、汝(な)れぞ戀しき、
言ひ得るは凡てこれなり。

汝(な)れ戀し、汝(な)れぞ戀しき、
唇にかつてのぼりぬ、
たかぶりのわが詩の中に

この聲は今も鳴るなり。
若き女(め)のたのしむ群や、
わが眼(まみ)は汝れにとまりぬ、
汝(な)れ戀し、汝(な)れぞ戀しき、
少女(をとめ)子(ご)の千々(ち)なるなかに。

汝(な)れ戀し、汝(な)れぞ戀しき、
汝(な)が清く匂へる眼(まみ)や、
唇に笛をふくめば
人魅する音(ね)にこそ響け。

汝れ擇りし心の心
いとゞしもかくぞ叫べる、
汝れ戀し、汝れぞ戀しき、
汝が運命いかゞあるとも。

やろーの岸。

ハミルトン（一七〇四―一七五四）

『粧ほへよ、粧ほへよ、
わが麗はしき、麗はしき花嫁よ、

粧ほへよ、粧ほへよ、
わが美しき妖姫よ、
粧ほへよ、粧ほへよ、
わが麗はしき、麗はしき花嫁よ、
いざや、やろーの
岸を去らなむ。』

『麗はしき、麗はしきその花嫁を、
そも、何處にて汝れは得てしぞ、
美しきその妖姫を

そも何處にて汝れは得てしぞ。』
『赤楊折るも
看るには堪へぬ
やろーの岸にて
われは得てしよ。』

『泣かざれな、泣かざれな、
わが麗はしき、麗はしき花嫁よ、
泣かざれな、泣かざれな、

わが美しき妖姫よ、
やろーの岸べ
赤楊折るを
めとに見て去り行くも、
やよ、汝が心傷ましめざれ。』

『汝が麗はしき、麗はしき花嫁は
そも如何なればうら泣くぞ、
汝が美しき妖姫は
そも如何なればうら泣くぞ、

やろーの岸べ、
赤楊折るを
汝れ、如何なれば
見るに堪へざる。』

『妹とはに、妹とはに
泣かでかなはじ、泣かでかなはじ、
悲愁懐いて、
妹とはに泣かでかなはじ、
われ、またとはに

やろーの岸べ
赤楊の折るを
見るには堪へじ。

『妹、戀し男を、
戀し男を、
愁ひのもとの戀し男を
見染めしものを。
やろーの岸べ
赤楊折りし

そのみやび男を
われ殺したり。

『あはれ、やろーよ、やろーの川よ、
いかなればそも汝が水は流るゝや、
悲愁切なる汝が聲の
いかなれば岸に響くや、
彼方なる
荻蘆、みだれて、
やろーの岸の赤楊に

そもいかなれば懸れるや。

『悲しげの、悲しげの
彼方潮の面なるは何ぞ、
彼方潮の面なるは何ぞ、
あはれ、悲しや、
あはれ、やろーの
汐騒暗き岸邊にて
わが殺したる
みやび男なるか。

『あはれ、その創を洗へよ、
涙もて創を洗へよ、
悲愁に堪へぬ涙もて
創を洗へよ、
うれふる如き荻蘆もて
亡骸を包み、
やろーの岸に
ねもごろに葬れな。

『やよや、築けよ、やよや、築けよ、
姉妹よ、悲める姉妹よ、
悲める姉妹よ、
愁もてその墓をば築き、
墓を繞りて
見る目かなしう、
やろーの岸の
彼の悲運を泣けよかし。
『呪へよ、呪へ、甲斐もなかりし、

甲斐もなかりし彼の楯をば、
悲却のことをなしたりし
わがかひなをば、
やろーの岸べ、
彼の胸乳を、
やさしげの彼の胸乳を
貫きし致命の槍を。

『戀すなと、戀すなと
われ汝れを警めざりしや、

○鬪ふを警めざりしや、
さはあれ、悲しや、
血氣に逸り、
いや強きかひなにぞ
汝れは會ひつる、
やろーの岸に斃れつる。

『赤楊薫り、
草綠り深く萌え、
黃なる雛菊

やろーの岸に咲き匂ひ、
美し林檎は
巖に懸り、
やろーの水ぞ
清う流るゝ。

『やろーも清く流るゝや、
ツキードの清う清う流るゝが如く、
その草みどり深きが如く、
その雛菊の黄なるが如く、

その岸の
赤楊高う薫るが如く、
その岩に懸れる
林檎妙なるが如く。

『汝が戀は美しかりき、
げに汝が戀は美しかりき。
汝が粧ほひの華やぎに
彼れこそ汝れに迷ひたれ。
彼れは、美し、

愛でられつるもことはりよ。
さはれ、彼などわが如く
汝れをば切に愛づべきや。

『粧ほへよ、粧ほへよ、
わが麗はしき、麗はしき花嫁よ、
粧ほへよ、粧ほへよ、
わが美しき妖姫よ、
いざ、粧ほうてツキードの
ほとりにてわれをば愛でよ、

やろーの岸を
またとこしへに思はざれ。』

『麗はしき、麗はしき花嫁と
われいかで粧ほひ得んや。
美しき妖姫と
われいかで粧ほひ得んや。
やろーの岸べ
わが戀し男を殺し、者を
ツキードの岸にてなどか、

われ愛で得んや。

『あはれ、やろーの川原野よ、
雨とこしへに降らざらむ。
やさしき花に
露みつることなどあらむ。
よしや、彼れ、わが戀し男に
あらずとせむも、
わが戀の、わが戀の
あえなく果てしところをや。

『外袍、みどりの外袍をば、
わがたゞ一つ縫ひたりし
むらさきの胴衣をば
彼の戀し男ぞ着たりける。
あはれ、憂いかな、
いで立ちの美々しき彼れが
草葉の露と消えんとは
いかで夢にも思はんや。

『わが悲愁を
　知らぬかに
彼れ乳白の、乳白の
　三才駒を引き出しぬ。
さはれ、夕榮
　消えざるに、
やろーの岸の
　露とぞはやも果てにける。
『やるせなの思ひ歌へば

森の應へし
悲し、悲しきその昔ぞ
　いとゞ戀しき。
さはれ、夜なほあけざるに
　槍の穗先はひらめいて、
わが戀斃れ、
　われ痛む。
『わが、頑の、頑の
父も何をか爲し得んや。

憫みもなき忿怒のみ
われに懸らむ。
わが戀し男の
血は汝が槍の穗にあるを、
頑の人よいかんぞ、
如何んぞわれを說き伏せ得んや。

『わが幸多き姉妹は
高ぶりてぞあらむ、
憫みなくも、

つれなくも嘲笑ひつゝ、
柩に伏せる
わが戀し男を
やろーの岸に
求めよとわれに言ふらむ。

『兄ドグラスは
恐ろしの言葉ふるうて、
わが心ひるがへさんと
われをや責めむ。

わが戀し男の
血は汝が槍の穗にあるを、
汝れいづくんぞ
わが心をば奪ひ得む。

『さりや、臥牀を、
戀の臥牀を整へよ、
とつぎの死衣に
わが身を包め、
今日をば晴れの少女等よ、

戸をさと開き、
待ちに待ちたる
戀夫を導き入れよ。

『さはれ、待ちに待つ夫とはそもや、
夫とはそもや、誰なるぞ。
思ふに、その手
血に濆れたり。
いぶかしや、看れば彼方に
亡靈ぞ顯はれ出でし、

血汐垂れつゝ
青き衣着て從ひ來なる。

『色青き彼の人を、
彼の人を横へよ、
あはれ、枕と、わが胸に
冷たき頭横へよ、
取り去れよ、
その荻蘆をば取り去れよ。
黄なる雛菊折りかけて、

裂けもやせむのわが額巻けよ。

『汝れ青くとも、
いと、いと戀し、
悲し、われ今
汝れをば甦かし得ざるとも、
夜もすがら
われに凭れかし、わが胸に。
君ならで若者誰か
そこに凭りしぞ。

『げに〳〵青し、
戀し、戀しの若者や。
宥せ、血汐を流したる
人をも宥せ。
夜もすがら
われに凭れかし、わが胸に。
君ならで若者誰か
そこに凭りしぞ。』

あはれ、歸れや、
歸れ、悲しむ花嫁よ、
あはれ、歸りて
甲斐もなの涙はらへよ。
汝れ、歎くとも、
汝が戀し男は知らざらむ、
あはれ、彼れたゞ亡骸と
やろーの岸に伏せるのみ。

歌。

コールリッヂ（一七七二―一八三二）

「戀」とはそれよ、
　卷きたる花の
卷きいと繁き
　鞘裂くつるぎ。
みづから裂きし
　裂け目を漏るゝ

「刀身」のきらめきぞ
　ほのかに見ゆる。
みづから裂きし
　裂け目を漏れて、
「戀」のきらめく
　刀身ぞ亦見ゆる。
鏽とくつるか、
　ふたつに折れて
のこるは欄や、

きれの碎けや。

ありし日。

ブラウニング女史（一八〇九―一八六一）

一

手をとりて立ちぞなれつる
川のべにひとりし立てば、
行く水にうつれる影の
たゞひとつ黒きも淋し。

手をとりて踏みぞなれつる
岸の徑ひとりし踏めば、
亂れ伏す草葉の露の
わが袖に落つるも悲し。
ありし日の君を偲べば。

二

渚なる千艸の花は
眼もはゆに亂れ咲けども、
わが乞ひに身を折りかゞめ、

花を摘む人またあらじ。
赤楊の梢がくれに
音もさやに鳥は啼けども、
ありし日の君が誓ひの
その歌をさえしが如く
わが泣く音たかくはあらじ。

三

川のべにひとりし立ちて、
誓ひをば思ひかへすに、

幽かなる、あはれ、眺めや、
誓ひをば破りしば君よ。
ありし日のわが戀人よ、
咲く花をわれ棄て去らめ、
啼く鳥をわれ棄て去らめ、
花鳥を、よし、さゆるとも、
われ君をさゆるに堪へじ。

四

やよ、思へ。わが眞心は

宥したり君がいつはり。
わが祈禱、神もあはれと
おぼしゝか、君を救ひぬ。
わが悲愁—(いかに長きか、
鞘を見て刀身は知らるべし、)
うらぶれのひとりし送る
死よりなほつらき生命や。
ありし日の君今知れや。

君はそれ。

バーンス。(一七五九—一七九六)

君はそれ、くれなゐ炫ゆる
初夏の薔薇の花か、
君はそれ、彈奏ゆかしく
鳴り出づる絃の響きか。
艶なりや、美し愛少女、

君おもふ思慕ぞ深き、
わが思慕とはにかはらじ、
海あするときはありとも。

海あせて照る日に岩の
熔くることありとも、妹よ、
わが思慕とはにかはらじ、
玉の緒の絶えなば絶えね。

我妹子よ、いざ幸くあれ、

幸くあれ、しばしよ、妹よ、
千萬里、隔かり行くとも、
われ、やがて歸りくべきに。

六絃琴に合して歌ふ手
弱女に寄す。

シェレー。(一七九二—一八二二)

月ほのかなる彩の光が
かすけく寒き天星越えて
照るもさながら、

いともやさしき、さりや、汝が聲、
魂なき絃に
その音與へぬ。

今宵もくだち、夜半とならば、
影ほのかなる月は眠るも、
星こそ醒むれ。
汝れが唱ふる調の露の
快樂撒くとも、
葉はふるはじよ。

あはれ、絃の音、よし、高くとも、
人の世ならぬ遠きある世の
月のひかりと
樂と心とひとつなる世の
ふしもゆかしく
君よ、歌へな。

正月元日。

サウジー（一七七四―一八四三）

やよ、かなしげの道者よ、來れ。
小暗き冬の花束摘みて、
われと連れ立ち、
「時」のみ墓を
今し飾れよ。

とぶらひの歌うたへ、道者よ。
われ往きし日に哀歌さゝげむ。
肅かなる今

とぶらひの歌ぞ
いとゞ適へる。

聞け、たのしげの鐘今も鳴り、
歡樂高う告げ知らすかな。
あはれ、この日よ、
清きこの日よ、
歡樂來る。

人よ、「運命」は玉手さしのべ、

汝がさかづきに幸を充すよ。
その雲もなき
太陽はうら〳〵と
夏を照すよ。

喜び得るや。—「時」去り往くを。
夜、夏の日をやがて掩はんを。
「年」の小河の
「永劫」さして
流れ去るをも。

五慾をみたす富はありとも、
力もつとも、汝が身を思へ。
汝れは人なり、
「死」こそ、これ、汝が
家の寶よ。

「愛」を知れりや。「美」のうらゝ太陽は
汝がよき心なぐさめたりや、
ゑまひ正しく、

まなざし清く、
聲やはらかに。

おゝ、幸の國。枯林を度る
風すさまじう吹き捲く聞けよ。
小暗く寒き
冬去り、今は
うれしき春よ。

君、「想像」は暗きに過ぐる

色もて過去を描きしと云ふや。
闇行く小女、
眉根をひそめ、
人おびやすと。

麗女姿を見ましと乞ふや。
小女たのしうたのしむ時の
彩のみけしは
太陽にうつろひて、
流れかゞやく。

あゝ、巡禮の道に行き暮れ、
風に痩せたる荒き山より
彼方しづけき
谷こひしげに
見るも甲斐なや。

たのしき聲に耳を塞ぎて
かなしき歌を愛づる者あり。
思ひ沈める

この調をば
よしと言ふべし。

げに希望なき「愁」は「時」の
過ぐるをほがひ、西に入る太陽の
又夜となり、
一日往けるを
歡ぶものぞ。

「艱苦」の重荷擔へる者は

ばてなか〳〵に悟るものなり。

「浮世」は旅路、
かの墳塋ぞ
休息のやどり。

ベンデミアーの川。

ムーア（一七七九—一八五二）

ベンデミアーの川波に
影をひたせる薔薇の園、

園をめぐりて鶯は、
ながき一日を歌ふなり。
稚なかりしその昔、
薔薇の匂ひにつゝまれて
かの鶯の歌聽くぞ、
ゆかしき夢に似たりける。

かの花園を、かの歌を、
いかでか、とはに忘れんや。
頃も眞夏となり行けば、

をりふしひとり思ふかなー
今も昔しの鶯は
そこに歌ふや。花薔薇は
ベンデミアーのしづかなる
川べに匂ひ輝くや。

否々、水にしだれてし
薔薇もたちまち凋れ果てつ。
匂ひこぼるゝこと花の、
めづらしとてか、植ゑられつ。

かくて眞夏の去りし時、
眞夏の香をば放ちてし
薔薇の花より音もなく、
おつるや、露の一しづく。

さなり、かくてぞ、思出は
とはにかへらぬ快樂より
あゝいくとせか、消えやらぬ
蕊のかをりを啜るかな。
かくてぞ、むかし麗はしと

眼に見えしごと、今魂に
ベンデミアーの川岸の
花の園こそ見ゆるかな。

雲雀に與ふ。

ウォーズワース

天つ御空の伶人よ、
ひとり空行く旅人よ、
憂きのみしげき塵の世を

汝れそも嗤ひ嘲るか。
久堅高く揚るとも、
汝れが心よ、汝れが眼は
ねぐら離れず、露深き
廣野の上にありや、そも。
あはれ、ねぐらの戀しくば
思ふがまゝに降り得む。
打ち振る羽の閉づるとき、
歌の調は已まむのみ。

見る眼のとゞく限りまで、
あらず、そを越えいや高く、
揚れ、ゆかしの伶人よ。
愛をほこりの汝が調べ。
（汝れと汝が歌、あゝそこに
とはに絶えせぬ結びあり。）
調べは野べの眞中にて
響かぬとしはあらねども、
青葉しげれる三春べを
よそのながめと知らぬかに

歌ふに似たり、汝れはしも、
心ほこりの汝れはしも。
蔭濃かなる森はかの
夕鶯にまかせかし。
照る日の光滿ち亙る
天つ御空ぞ汝が領よ。
そこより遙か下つ界に
汝れこそ聖き喜悅もて
調和の潮流そゝぐなれ。

あゝ、汝れはしも聖賢が、
天と地とのいづれにも
忠實なる心つなぎつゝ、
塵のけがれの世を超えて
高きを踏むに似たるかな。

やろーの流。

ローガン（一七四八—一七八八）

江上始めて郎に逢うて

この岸うれしかりきーやろーの流。
江波今や郎を埋めて
この岸さびたりなーやろーの流。

これよりとはにやろーの流、
あゝ空しく斷腸の水となりぬ。
この岸又看るに堪へんや、
妾が戀ーやろーの花を。

阿鼻の花亭へ妾を載せんが爲めに、

郎は妾に白馬を約しぬ。
阿舅の高樓へ妾に侍せしめんが爲めに、
郎は妾に妖童を約しぬ。

郎は妾に誓の指環を約しぬ。—
明旦應に擧ぐべかりき。華燭の典。
何ぞ圖らむ。郎は忽ち墓に嫁ぎぬ。
悲いかな—やろー水底の墓。

昨日相見て郎が詞何ぞ優しかりし。

心中語りつくして妾が思何ぞ爽かなりし。
郎がかひなによりて
思はんや。又逢ふの時なからんとは。

郎逝いて忽ち亡魂を見たり。
消えては空しく殘る哀々の叫。
水鬼髣髴として浮ぶこと三たび。
啾々たる哭聲江に滿ちぬ。

焦心何ぞ堪へん。慈母の情。

阿姑悄として窓に倚つて立つ。
阿妹戀々兄を思うて止まず。
泣く泣く叢裡の路をたどる。

家人郎を尋ぬる、東又西。
林中求めつくして求め得ず。
只看る。夜雲寞々の影を。
只聞く――やろー滔々の聲を。

窓に倚りて眺むるを休めよ。

君に又子なけん。やさしき阿姑。
たどるを休めよ。可憐の阿妹。
あゝ、なれに又阿兄なけん。

東又西、尋ぬるを休めよ。
林中普く求むるを休めよ。
暗夜郎は死して
やろー水底に横はる。
涙痕妾が頰に絶えざるべし。

又何ぞ二夫に見ゆるを望まん。
江上たゞ郎が屍を尋ね得ば
妾は共にやろー水底に眠らん。

涙痕つひに頰に絶えざりき。
あゝ、つひに二夫に見えざりき。
阿女つひに郎が屍を尋ね得て
今は共にやろー水底に眠る。

鷲。斷篇

テニズン（一八〇九—一八九二）

鈎なす足に巖をつかみ、
青空摩せる荒地を占めて、
照る日にちかく鷲ぞ立ちたる。
下に寄せては逆巻く海を
山のがけより遠く見おろし、
いかづちの如落ち來るかな。

あはれの少女。

ウヲーヅヲーース

あけぼの雲のしらむ時、
市家の軒の籠にして、
歌ふつぐみの聲高し。
あはれ、三とせのながの日を、
賤の少女は行きかひの
足をとゞめてやゝしばし

しづけき朝の裡に立ち、
聽きもなれたるその聲よ。
妖しいかなや、その調べ。
少女なやます力あり。
樹木のまぼろしさながらに
み空に高くそゝり立つ
山ぞ少女に現ゆるなり。
あゝ、うら〳〵とほのかにも
嵩なす靄は河を這ひ、

水は廣野を流れ去る。

小桶かゝえて幾千度、
踏みもなれたるなつかしの
谷の眞中の牧の野や、
はてしも知らぬ天地に
あゝ、たゞひとつ身を寄する
宿とたのみて愛づるなる
鳩の小巣にや比ぶべき
小屋ぞ少女に現ゆるなる。

望みはつきじ、いつしかに
魂縹緲と天に入る。
さはれ、忽ち消えて行く
霧よ、小川よ、丘よ、森、
流るゝ水は見えずして、
欹つ丘もはた見えず、
あゝ、もろ〳〵の色はみな
失せてあとなき恨かな。

爾等英國の水兵。

カメル（一七七—一八四）

祖國の海の守りなす
爾等英國の水兵よ、
爾等が御旗はたたかひに、
はた、微風に空高く
そびえ誇りて一千年。
ほまれは高き爾等が旗、

敵を撃たんと飜へり
蒼溟を掃うて進むなり。
風起ち狂ひ吹くとても、
戰喊高く長うして
風起ち狂ひ吹くとても。
爾等か父祖のたましひは
波の穂ごとにこもれりな。
あはれ、甲板は響れの野、
大海原は墓なりき。

そこに斃れぬ、ブレークも、
鬼神の如きネルソンも。
蒼溟を掃うて進むとき、
爾等が雄心燃え立たむ。
風起ち狂ひ吹くとても、
戰喊高く長うして
風起ち狂ひ吹くとても。

嶮をかたむる城廓も
大英國にえうはなし、

山なす波をうち越えて
行くぞわれ等の進路なる。
蒼溟の上こそ家居なれ。
大濤岸に吼ゆるとも
いくさぶねより鯨波あげて
吼ゆる大濤鎭むなり。
風起ち狂ひ吹くとても、
戰喊高く長うして
風起ち狂ひ吹くとても。

戰雲慘たる夜の去りて
平和の星のかへるまで、
御旗は高く大空に
流星のごと燃え立たむ。
われ等の歌と美酒は
爾等が譽れに酬いんと
御國に溢れ流るべし。
狂へる風も吹きやまむ。
鐵火のひゞきおさまらむ。
狂へる風も吹きやまむ。

疑ふを休めよ。

プロクター女史（一八六四沒す）

一の聲　燕いづこに去りぬらむ、
飢ゑて凍りて、
浪しぶく荒磯濱に死にやせし。

二の聲

疑ふを休めよ。

むらさき匂ふ海のあなた、
日かげ浴びつゝやすらけく
かをる南の風まつよ、
又も北なる巣をとめて飛びも立たむと。

一の聲

花なにゆゑに枯るゝらむ。
寒きみ墓に
朽ちはてゝ涙も雨も知らざらむ。

二の聲

疑ふを休めよ。

冬の嵐の吹けるまを
毛よりも輕き白妙の
深雪の下に睡るのみ、
やがてゆかしき香に出でて咲まゝしものと。

一の聲

天つ日影のかくろひて

日數經にけり。
いたましの「時」しこの世を去るべきか。

二の聲

疑ふを休めよ。
風を孕(はら)みて飛(と)ぶ雲の
ひとつ日の照る天掩ふも
やがてや、(春のちかければ)
今ぞたのしき時なりと夏を醒(さま)さむ。

一の聲

うれしき希望(のぞみ)絶(た)えはて、
光は消えぬ、
何の音か、絶えし希望の寂寞(さびし)破(やぶ)る。

二の聲

疑ふを休めよ。
天つ御空はくらくとも、
くらきが故にいや照りて、
星こそつひに顯(あら)はれ。

天つ使のしろがねの聲ぞきこゆる。

二月の夕。

ロングフエロー

日は今將に暮れんとし、
夜の幕將に落ちんとす。
沼は氷に封されて、
流るゝ水に聲もなし。

灰さながらの雲もれて、
夕日ぞ紅く照り添えば。
里の小家の窓板は
紅くかゞやき光るかな。

又しも雪は降り出でぬ。
墻は埋れてあともなく、
廣野通ずる道筋を
はた見分くべきすべもなし。

物たそろしき影のごと、
野べおくりする人々は
牧場いくつか横ぎりて
いとゆるやかに過ぐるなり。

鐘鉤々と鳴り渡り、
萬感こゝに湧き立ち
胸裡無限のかなしみは
さびしき鐘の音に應ふ。

練り行く影ぞいと長き、
心、悲哀に堪へずして、
人とぶらひの鐘のごと、
胸うちふるひ騒ぐかな。

三月兄弟川の川裾
なる橋に凭りて。
ウヲーヅヲースー

鶏うたひ、
川水あふれ、

小鳥さゝなき、
湖の面ひかり、
綠野は照る日にねむる。
老も少きも
若きと稼ぎ、
秣食む牛は
頭もあげず、
數四十ひとつさまなり。
敗れし軍勢と

雪は消え失せ、
丘のいたゞき、
はづかに白く、
鋤把る子をり〳〵叫ぶ。
山に歡樂
泉に生命。
雲青空を
ゆるく行きかふ。
あゝ、雨は霽れてあとなし。

スーザン。

ゲイ（一六八—一七三）

長旗を風になびかせて、
こゝらの艦のとまりけり。
見よや、スーザンたゞひとり、
甲板に登り來りしが、
『あはれ何處に夫やある。
水夫よ、告げてよ、わが夫も

波路を遠く旅すべき
定員に入りたりや。』

波のまに〳〵に搖られつゝ、
帆桁にありしキリヤムは
聞きもなれたる聲とめて、
深きなげきを漏しつゝ、
眸を下に放ちたり。
帆綱もろ手に輝きて
見ゆればはやし、電光と

甲板にこそはおり立ちぬ。

似たりな、高き揚雲雀、
巣より呼ぶ雌の聲きくや、
小き翼を胸にしめ、
忽ち落つるそのさまに―
はしき妻よりヤリヤムが
受くるゆかしの接吻を
位尊き艦長の
そゞろ嫉むもことはりよ。

『あゝ、なつかしきスーザンよ、
誓はとはに變らじよ、
しばし別離のつらくとも、
又の逢瀬はあるものを、
とく〳〵涙拂へかし。
よし、風すさび、浪立つも、
忠實なる磁針のその如く、
心は汝れに向ふべし。

『かはらぬ汝れが心をば
濁りにさそふ町人の
「海を家なる船人は
津々浦々に女をもつ。」と
語るに耳をかす勿れ。
あはれ、わが身をはなれざる
汝がまぼろしを外にして、
又何處にか妻あらむ。
『美し印度の海行かば、

汝れが眸を玉に見む。
汝れが息吹は亞弗利加の
かをる南の風ならむ。
汝れが肌は眞白なる
象牙の面に輝かむ。
かくて見るもの悉く
汝れを偲ぶの種ならむ。
『戰起りわれ行くも、
愛しきわが妻安かれよ。

よし、大砲の轟くも、
創をもうけでなつかしき
汝れがかひなに歸るべし。
愛の力はわがそばに
飛び來る彈丸も拂ふべし。
汝れがなげきをいとほしみ。』

船出の命は傳りぬ。
帆は忽ちにふくらみぬ。
艦を去るべき時は來ぬ。

あかぬ別離の接吻に
夫は俛れ妻は泣きぬ。
名殘をしげに距かり行く
短艇に百合花の手をふりて、
さらばと叫ぶスーザンや。

カレーの海のほとり
に立ちて。

ウヲーヅヲース

あえかなりや、夕星、西の光、

御國の星よ、御國の心に入らんとすらん。
さはれ、しばしを安らひて外國民に打勝てる
光榮の兜となりましと
地平に低く汝れぞ懸れる。
あゝ汝れは御國の表彰。
輝く星よ、燦たる汝れが美を享くる
御旗の上に笑まひつゝ、汝れはまたゝきすべきなり。
汝れが下、ほのかに黑きそこぞ、御國は。
そこにこそ御國はあなれ。
幸あれな、御國に、星に、汝れこそは

希望よ、運命よ、生命よ、榮光よ、
われ今こゝに外國人の中に立ち、
御國思へばあゝ恐懼、歎息の多きに堪へじな。

龍動橋。

モローイ

たかき、ひやしき、君、乞食、
橋うち渡り渡り行く。
つゞれよ、にしきよ、械よ、劍、

卑き、飾れる、かなしめる、
笑ひつ、泣きつ、いそぎつゝ、
斷えずうち群れ渡り行く。
大河は下に流れつゝ、
世をあざけりの歌うたふ。
いたみよ、歌よ、いそぎ行け、
みな日の下のほこりのみ。
水は流れてとゞまらず、
にしき、つゞれの動く世や、
水は流れてとゞまらず。

臙脂、白粉をぬり立てゝ
うれしと我妹ねりぞ行く。
仰げば高き天がした、
つゞれ、つぎはぎ道に滿ち、
鄙より出でし花や、夢、
都のちりにけがれ去る。
老へるはおのが影と這ひ、
わかきは赤き眼して行く。
いたみよ、歌よ、いそぎ行け、

みな日の下のほこりのみ。
水は流れてとゞまらず、
にしき、つゞれの動く世や、
水は流れてとゞまらず。

平和、喧争(あらそひ)、雨、日光(ひかり)
橋うち渡り渡り行く。
何處に行くと知りもせで
人生(よ)の荒波に浮びつゝ
むなしく日をば送る人、

かげに日南(ひなた)につどふ者、
歌ひ、かなしみ行き行けど
水は靜かに流れ去る。
いたみよ、歌よ、いそぎ行け、
みな日の下のほこりのみ、
水は流れてとゞまらず、
にしき、つゞれの動く世や、
水は流れてとゞまらず。

老朽甲鐵艦。

ホルムス（一八〇九—一八九四）

さらぬだに破れし旗を破れとや、
長くみ空になびきしを、
風にひらめくその旗を
見る眼はともにをどりしよ。
戰聲ひゞき砲の音
轟きたるもその下ぞ、

大海（わた）の面はしる天星は
又雲はらふことなけむ。

ものゝふの血汐流しゝ甲板や、
下に風あれ汐湧きて
浪たゞ白く立ちしとき、
敗れし敵は膝折りぬ。
勝者の踏みしも夢なれや。
敗者の伏しゝも夢なれや。
海の大鷲裂かむとて

岸なる屠者は狂ふとや。

おゝむしろ碎け破れし船體は
沈めて浪にまかせよや。
雷(いかづち)のごと海搖りて
艦はそこゝそ墓とせめ。
マストに聖(はた)旗を釘づけよ。
糸ほつれたる帆を張れよ。
それよ、雨風いなづまの
神の心にゆだねよや。

秋の太息。

リード

秋は太息し、
呻吟し、將に死せんとす。
斷雲空を奔りて
駿馬の如く、
影はかぐろく
牧場に落ち、

草を被れる、寡婦の
行くが如し。

紅葉婆娑たり、
點々として落ち、
翩々として飜り、
木立
兀として
あざけりて聳ゆ、
恰も血を滴らす

巨人に似たり。

屋を繞りて
風は激し。
終日、
悲哀を訴ふ。
晩來、
霜凍りて
雪の近きを
囁くが如し。

冬は
萬里の氷地
グリーンランドより
來つて
寒光みなぎる。
宛たり、
月光白く
うしほを照らすに。
今ぞ嬉々たる、燦爛たる

大小の歡樂は
珍寶をもて
みたすといへども、
憂愁、
狂暴、
悲哀、
みな之れと共に來る。
德あるも、
慘たる屋根裏に、

はた地上に
棲めるもあるべし。
更に幸なきは、
犬の如く
人の門に立て
一片の食を乞ふもあるべし。

天はれず、
風は戸にあたりて
悲泣し、

怒號し、嘲罵す。
この喧噪、
怒號、嘲罵の中に、
聽けよ、貧しき者の
悲泣する聲を。

戰の場ゆ。

テニズン

いくさの場(には)ゆ家の子は

主君の亡骸かき込みぬ。
夢か、うつゝかしら百合の
たほれもやらず、音も立てぬ
夫人見守り侍女は云ふ、
『あはれ涙のこぼれずば
悲痛のきはみ玉の緒の
絶えもしぬべし、絶えぬべし。』

侍女はかたみに聲低く、
『心みやびの主君なれば、

人の愛でしもことはりよ。
友には忠實に敵にさへ
厚きなさけをかけにき』と
主君の生前を語りけり。
さはれ夫人は物言はず、
かすかにだにも身動がず。

侍女のひとりはひそやかに
座をば離れて歩み寄り、
しづかに主君の亡骸の

顔のおほひを取り去りぬ。
さはれ、夫人は身動がず、
涙おとさんさまもなし。

寄る年波に髪白き
乳母は起ちてをさな子を
夫人の膝にそと据ゑぬ。
見よや、涙は夏の日の
雨さながらに亂れけり。
夫人はつひに言ひけらく、

『あはれ、いとし子、汝ゆゑに
をしからぬ世に生くる身か。』

眠に寄す。

ウォーヅワース

打ち連れて徐かに過ぐる山羊の群、
雨のひゞきよ、蜂の音よ、川の瀧津瀬、
風と海、たひらに延べる廣野原、
白き水の面、清き空、こもゞ胸に

入り來れどいも眠られず、わが園の
梢に歌ふ百鳥の調ぞやがて
聞こゆなる。わが先づ聞くは郭公、
うらかなしげの叫びなり。よべの一夜も、
二夜しもぬるとはすれど、甲斐もなく、
眠よ。汝れを得ざりしに、今宵はわれを
うまさゞれ。汝れあらずんば凡てかの
あゝ、かの富も何かせむ。いざ來よ、日々の
境守。あはれ、清しき想像の、
あはれ、たのしき健康の母よ、いざ來よ。

わが家。

ベーイン（一七九二——一八五二）

この世の宴樂、玉の殿
得まくほりせば得らるべし。
さはれ、長閑に棲みなれし
わが家にまさるものぞなき。
天つ御賜の幸はしも
いぶせのわが家聖むなり

こはこれ、いづら極むとも、
此處をしおきてなどあらむ。
わが家、わが家、たのしきわが家、
わが家にまさるものぞなき。
あゝ、わが家にまさるものぞなき。

荒野の月を仰ぎては、
小草の露も身にぞしむ。
思ふよ、母が戸に倚りて、
軒のかづらの葉の間もる

ひとつ月影ながめつゝ、
われをや偲び給へると。
よしや、かづらの花咲くも、
また見むすべはあらぬ身や。
わが家、わが家、たのしきわが家、
わが家にまさるものぞなき。
あゝ、わが家にまさるものぞなき。

われ、さすらひの今の身に
かゞやく殿も何かせん。

あはれ、葎にとざされし
草の庵こそ戀しけれ。
呼べば寄り來てほがらかに
啼きし鳥こそ戀しけれ。
平和になれし心こそ
いや懷かしく戀しけれ。
わが家、わが家、たのしきわが家、
わが家にまさるものぞなき。
あゝ、わが家にまさるものぞなき。

郭公に與ふ。

ブルース（一七六六—一七六七）

よくこそ來ませれ、あはれ美しき
杜なる賓客、春の使、
皇天今こそ汝が家をさめ、
汝れをば迎へて杜は唱ふ。
雛菊野の面を飾る頃よ、

あゝ汝が啼かざることはあらず、
そも汝が來る道、めぐる年の
季をば敎ふる星のあるか。

うれしき賓客、汝れと共に
花咲くとき世を迎へ得ては
杜なる小鳥のかなで歌ふ
ゆかしく妙なるしらべ聽くよ。

むら生ふ櫻草摘まんとては

杜をばさまよふ學童等の
新なる三春の聲を聞くや、
おどろき、佇み汝が音まねぶ。

秋風紫荳の花を吹かば
鳴きつゝ谷越に翔り去つて
今年も將また遠つ國に
新なる三春を迎ふらんよ。

うれしき小鳥よ、汝れが宿は

とこしへ緑よ、汝れが空は
とこしへ晴れたり、汝れが歌に
哀なく、汝が生に冬はあらず。

あゝ、われ飛び得ば汝れと共に
年ごと歡喜のつばさ張りて
あまねく地球をめぐり行きて
三春の同伴者たらんものを。

「熟睡」はわが魂。

ウォーヴォース

「熟睡」はわが魂とざし去りて、
あゝ、又浮世のおそれあらず。
彼の女はこの世の觸るゝ年も
心にたぼにぬものゝ如し。

彼の女は動かず、力もたず、

聽くなく、見るなく、日ごとく、
苦むすいはほや、花とともに
地球のめぐるに任すのみよ。

チソーナス。

テニズン

小註

チソーナスはツロイの王、ラオメドンの王子なり。花もはぢらふ美しさは輝くばかりなりければ、曙の女神エチスに戀せられて、つひの日、御空に徵さ

れて脊の君とかしづかるゝ身とはなりぬ。ひと日、とこしへに絶えぬ玉の緒を得まほしうチソーナスが切なる願ひにエチス、すなはち、こを父なる大神になげきもとめ給ひけり。かくてチソーナスは不死の命を得にけれど終の世までも若やかにおもわの輝きおとろへであれとは、かけても思はざりけむ、そのかみのねぎ言にもりたりければ、寄る年波の涙の穂白う絲の髮も色かへてけり。今は生くとも何かせむ、死ぬるこそいとせめてうれしからめとかこち申しけれど神だに一たびたびしは

え取り返し給はぬことといて、いやます姿の衰あはれに、やがては眼もしひ、耳もしひ、あさましの姿となりはてぬ。天に榮ゆる驕樂の園生の幸もかうなり行いては、何一つ心なごめのたれとはならじ、死にてしがな、死にてしがなと日ごと〳〵うちはへ泣くにエチスかなしみに堪へず、空しうつきせぬうらみをのみて終に蟬とはなし給ひぬ。

この詩一篇はエチスに死なんことを願ふチツーナスの詞なり。

深山の木立ものふりて、
ふりては倒る。天雲も

おりては野べの露と凝る。
あした、田の面に鋤を把る
人はゆふべの煙なり。
長きいのちの鵝鳥だに
百、とせ經れば死ぬものを、
われのみ絶えぬ玉の緒に
いとゞ悶えの燃ゆるかな。
高き宇宙のはてしづけしや。
幾重たなびく霧の上を、
輝く朝の大殿を

髪に霜おく影ひとり、
まぼろしのごとよろぼひて
君がかひなにいややつれ行く。

あゝ、この老いはてしまぼろしも、
かつて、下界の人にして、
かんばせ花に過ぎたりき。
君が夫(つま)としなりてより、
ほこりはいとゞ彌増(いやま)して、
神とのみこそ覺えしか。

『絶えぬ玉の緒賜へや』と
われの願へば、君はしも
富(と)めるが物をしげなく
かづくるさまに似たりけり。
ゑみを浮べて允(ゆる)しゝも、
強きは「時」の神々の
怒りの心解(と)けがたみ、
塵にまみれて、色あせて、
老にあへげる身となしつ。
さはれ、玉の緒絶ちも得ず、

うつることなき手弱女の、
うつることなき手弱女の
み前に死なぬ老の身を
生きよとばかりすげなくも、
なしゝは永久に不具にて
ありし面影燃えつきぬ。
君がなさけも、み姿も
今はむかしにかへし得じ。
み先驅をはらふ白光の
星、そらちかうきらめきて

わが言の葉を聽くなべに
眼に涙をみたすかな。
わが、玉の緒を絶ち給へ。
おほい御賜をとり給へ。
などては人の願ひけん、
同胞の住む世を脫らんとは、
さだめの命越えんとは。
さだめの命そこにこそ
いとふさはしき休みあるなれ。

そよ吹く風に雲きれつ。
見え渡るかな、わが生れし
くらき下界のほのかにも。
あな、麗はしや、額よりも、
あな、麗はしや、肩よりも、
心、にひなる胸よりも
昔ながらに聖らけき
光明四方を照すなり。
君がおもわや茜さし、
くらやみ漏れて匂ふなり。

星の光のけおされて
うすれて遂に消ゆるまで、
君がやさしき眼はしも
わが眼ちかく澄めるなり。
はやる天馬は身をおこし、
君が軛をもとめつゝ、
亂れたてがみうちふれば、
ありけん闇はあともなく、
打てば東雲散り失せて、
ちぎれ〳〵の炎とぶかな。

かくも日ごとに麗はしう
なりこそまされ。答へせで、
疾くのみ君は出でますや。
ひとり居のこるわが頰に
君が涙の玉ぞかはかぬ。

そもいかなれば日ごとく
涙にわれをおびやかす。
遠き昔にかのくらき

浮世に聞きし諺や、
『天つ神だに賜ものを
とりかへし得じ』てふをしも
眞實なるかと恐れおのゝく。

あゝ、その昔、花の香の
あとなき夢のその昔、
いかに嬉れしき心もて、
いかに嬉れしき眸もて、
うすきはやがて鮮やかに

照りまさり行くみ姿を、
おぼろに黑き旗雲の
榮えてまばゆくなり行くを、
ながめなれけん。あやしくも
君がうつろひ身に享けつ。
君がみ前に、み門べに
くれなゐ漲す靜かなる
光につれて血汐さへ
輝き行くと覺えつゝ、
身を横へてわれあれば、

口に、瞼に、額にだに
今を彌生と咲き初むる
花にいやまし薫るなる
キッスの露のあたゝかや。
ツロイの城壁が雲のごと
み空に高くおこるとき、
アポロの神が歌ひてし
その大御歌さながらに
奇しくうれしきさゝやきの
漏るゝ唇聽きもなれにき。

永久にわが身を君が知る
このひむかしに停めなせそ。
あつき情も、今さらに
うくるはつらし、中々に。
くれなゐ匂ふみ影だに
今はさむくぞ身にはしむ。
射すみひかりもたゞ寒し。
死ぬる力をもつ人の
幸多き家さては又、

いや幸多き亡き人の
深草しげれる墳塋を
かこむ野べよりかすけしや、
浮べる靄をながむれば、
輝く門にたゝずむも
やせさらぼひし足寒し。
救ひ給へや、かへしませ、
君はわが墓見給はん。
見得ざるものはよもあらじ、
君は朝ごと麗はしう

なりこそまされ。われはしも
かの世の苦の下にして、
むなしき天庭を白銀の
照るや、み車驅りまして
かへらん君を忘れなんかな。

春香傳の一節。

韓人は慢然春香傳を以て小説といへども實は諧調整然たる語物の部類に屬す、蓋し韓國にありては小説稗史の類を以て士大夫の手にすべきもの

ならず、總て深窓の裡婦女子の誦むべきものとなすが故に漢字を混へず全く諺文のみより成る、異本頗る多くして長短一ならず、作者年代共に不詳、傳に從へば三百年以前のものなりといふ、其果して朝鮮固有の文學なりや否や、予淺學にして審かなる能はず、今は暫く異本中の最も短きものを採れり、是れ後世の妄に筆を加へたる部分の少からんことを保すればなり。

さても我朝、仁朝の
御代萬歳の春なれや。

忠臣廷に列りて、
孝子、烈女は家々に滿つ。
時は此時、南原の
府使をつとむる李氏が子の
李都令年は十六の
顏、冠玉の如くにて、
風采は杜牧之、文章は
李白を凌ぐばかりなり。
冊房に籠りてこゝろざす
學びの道を勵みしが、

光に滿てる春の風、
柳櫻に映りてか、
雲の匂ひも長閑けしや。
群生ふ草木おのづから
樂む色の新みどり。
狸は山に孫を生み、
蝦蟇は野邊にや子をなさむ。
李都令そゞろ氣も浮きて
遊山の心消し難み、
幇子を召して云ひけらく。

『そもや爾が郡にて何處、何處ぞながめよき。』

幇子答へて申すやう、

『さりや、襄陽、樂仙寺、

江陵、鬱津、浮碧樓、

平壤、海州、鏡浦臺、

晋別、通川、蠶石樓、

平海、三陟、月松亭、

高城、杆城、竹西樓、

清江亭に望洋亭、

いづれおとらず佳けれども

佳きが中にもいと佳きは

こゝ南原の廣漢樓。

八道の景多くとも、

これには勝さるなきより

小江南と申し候。』

『もしも爾の言の葉の

眞なりせば佳かるべし。

佳しと聞きては今更に

行かではすまぬわが心、

いざやわが伴仕れ。
着きなばよきに計らへや。』

砥の面に似たる大道を
心の字、之の字の足波は
小風に搖ぐ青柳の
絲を小鳥の遷るごと。
やがて廣漢樓に行き着けば
手を脊に重ね徘徊ひつゝ
幇子間近かに指し招き

『岳陽樓、鳳凰臺の風光も、
黄鶴樓、胡蘇臺の景色も、
げにや此處には及ぶまじ。』
幇子たはしもまことげに
『かくもながめの佳ければぞ、
空晴れ渡り雲霧の
散り盡したる折々は
神仙此處に天降り
遊ぶことさへありとかや。』
『さもありぬべき眺望かな。』

今日は恰も天中の
節なる五月五日なり。
今し舞姫春香は
鞦韆すべき粧ひの
假の粧ひなか〳〵に
見れば見る程嬌なりや。
薄く抹きたる白粉は
遠山罩むる霞かも。
皓齒、丹脣、譬ふれば、

一夜、甘露に咲きそめし
三色桃の蕾かも。
黑雲の髪を半月の
臥龍梳もてときしその端に
むらさき帛を結ひ垂れぬ。
衣はむらさき、大段の
袴のひだはいとしげし。
靴もむらさき、爪先は
竹のくづしを刺繡りぬ。
髪に搖ぐは金鳳釵、

指に光るは玉環や。
看る眼眩ゆき胸飾、
あゝら、美し、麗はしや。
帶に挿みし玉裝の
守り刀にゆつたりと
金絲の紐をはこりかに
垂れて見するぞをかしける。
唐絲五色の紐をもて
兩國大將が兵符をば、
南北兵使が筒箇をば

佩ぶるにさても似たるかな。
或は若草綠なる
丘べに上りたのしげに
花を摘みとり摘みとりて
清き細流に投げて見つ。
或は小石を手にとりて
朗らに歌ふ鶯の
深く柳にひそめるを
飛ばすをかしく投げて見つ。

あはれ、これ亦長閑なる
春の眺望を添ふるなり。
妙への心に堪へも得ず
玉なす織き手を以て
長く垂れたる鞦韆の
綱をしとりて飛び上り、
一度搖れば前に高く、
二度搖れば後に高く、
高きはいよゝ高くして、
身は輕々と宙に入り、

雪なす白き綾絹の
足袋を穿きたるもろ足の、
くれなゐ匂ふ桃の花
垂れたる枝に觸るゝ毎に、
散るは花びらはら〳〵と
亂れて丘の花吹雪。
斜に挿せし金鳳釵
落ちてチリンと音清し。
あはれ、これ、亦長閑なる
春の眺望を添ふるなり。

李都令心はれ〴〵と
彼方此方を徘徊ひて、
春の山川ながむれば、
忘れし詩句も思ひ出づ。
折しも、彼方の木がくれに
花の少女の遊ぶ見て、
心忽ち恍惚の
いそぎ幇子を呼び寄せて、
『かしこに見ゆるはそも何ぞ』

幇子とぼけて何氣なく、
『何處かや、何も見えなくに
そもや何をか見給へる。』
李都令心せき立てゝ、
『かしこに見ゆるはそも何ぞ、
天つ乙女の天降り
遊びたまふと見るは如何に。』
『此處は蓬萊ならなくに、
此處は瀛洲ならなくに、
天つ乙女の如何にして

天降るべきことやある。』
『さらば何かや、黄金にや。』
『金、麗水に生ずとは
兼て承り侍れども、
此處は麗水ならなくに、
などか黄金のあるべきや。』
『さらば何かや、美玉かや。』
『玉、崑崗に生ずとは
兼て承り侍れども、
此處は崑崗ならなくに、

などか美玉のあるべきや。』
『さらば何かや、海棠か。』
『明沙十里の春ならば
海棠の花咲くべきも、
などてか此處に開くべき。』
『さらば何かや、亡き魂か。』
『北邙の山ならなくに、
など亡き魂のあるべきや。』
李都令いさゝか腹うち立て、
『さらばそも〳〵何なるぞ。』

幇子初めて告ぐるやう、
外にては候はず、
本郡の舞姫月梅の娘、
春香と申すものに候ふ。』

朝鮮歌謠。

○

積みし深雪の消えたるに
春去り來るも知らざりき。

仰ぐみ空はいとひろく
歸る雁金長閑けしや。
ねむれる柳芽を吹いて
水ひむがしに流れ行く。
酌げや、童よ、新しぼり
春を迎ひの酒なるに。

○

僮箒をとり持ちて
掃けどあとより花は散る。

散つても花はもとの花、
掃くな、積ましてながめなん

○

楚江の漁夫よ、言寄せん、
魚な、捕へそ、魚な烹そ。
あゝ、屈原の忠魂は
ながく魚腹にあるものを。
いかに鼎に烹るとても
などてか烹うるときあらむ。

○

さは飛ばざれな、白鷗よ、
われなど汝を捉へんや。
聖上に去られしわれはしも
汝に從ひこゝに來ぬ。
柳はみどり、春日照る
あはれ、長閑けき今日此日、
白馬、金鞭、花やたづねむ。

○

夫を戀ひしみ、うら泣きて
野越え、山越えひとり行く。

見るにつがひの家鳩が
翼かはして在るがごと、
夫は戀女と語らふを
障ふるに堪へぬわが心。

あはれ、歸りてひとり寢の

枕撫でつゝ泣きや明さむ。

ねんねこ唄。

ねむれ、ねむれ、來よ、來よ、ねむれ、
前のお家の狗もねた、
後のお家の狗もねた、
うちの坊やもねんねした。

西詩愛吟集 完

不許複製

明治三十九年一月一日印刷
明治三十九年一月四日發行

著者　小原要逸　文學士
發行者　福岡新三
東京市神田區表神保町二番地
發行者　岡村庄兵衛
東京市淺草區下平右衛門町九番地
印刷者　科仁衛
東京市日本橋區藥研堀町三十三番地
印刷所　厚信舍
東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

發行所
岡村書店　東京市淺草區下平右衛門町九番地
福岡書店　東京市神田區表神保町二番地

特約發賣
○東京
東京堂
上田屋
東海榮閣
前川文平
林屋
大川
淺見文林堂
修學堂
至誠堂
得策堂
○大阪
杉本書店
吉岡寶文館
中川勘助
名倉照文館
○京都
山中勘次郎
○名古屋
星野文星堂
梶田勘助
川瀨代助
○熊本市
長崎次郎
○鹿兒島
吉田幸兵衛
○久留米
菊竹書店
○函館
小島大盛堂

（定價金貳拾五錢）

6162